
エルおばあちゃん達

枯葉花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルおばあちゃん達

【Zコード】

Z9646Y

【作者名】

枯葉花

【あらすじ】

仲良し(?)四兄弟は、英雄とったわれるエルおばあちゃんのことが、気になつて気になつて・・・。

そんなエルおばあちゃんの過去のお話。

プロローグ

「おねえちゃん！　大発見だよー！」

おねえちゃんと呼ばれた、ウールは顔をしかめた。弟であるナイロンが『大発見』と言うのは、たいてい悪いことなのだ。

「何？　ロン？　あら、けど私。おかさんに、暇だったらお手伝いしてねと言われてたんだわ。暇じゃないけど、親孝行しましょうつと。

」
ナイロンは、姉にかわされたことに気づくと、真っ赤な目で睨んで、叫んだ。

「ほんとに大発見なんだよー！　おねえちゃんが知りたがってた、ポリエステルおばあちゃんの事なんだよー！」

ポリエステルと聞いて、ウールは目を輝かせてまくしたてた。彼女は喋るのが好きなのだ。

「ほんとに。ホントに？　ポリエステル？　エルおばあちゃん？　あの？　ホントにホントなのね。ロン。嘘だつたら、承知しないわよ？　え、けど。おじいちゃんが全然見てくれないじゃない。なのに何を見つけたっていうの。ロン。あーーー！　ロン。早く見せてロンーー！」
狙い通りポリエステルに過剰反応した姉を見て、ロンはにっこり笑うとからかつてみた。

「ああ。残念ーー！　けどおねえちゃんは親孝行するんだーー！」

ウールは墓穴を掘つて、弟に傷つけられている自分の自尊心より、エルおばあちゃんのことが気になつたので、先を促した。

「早く出して。」

「・・・持つてないんだよ。おねえちゃん。今から取りに行くの。
それを聞いたウールは、やつぱりテーマだったのかと、傷ついた自尊心の方を心配した。

「僕、聞いたんだ。おじいちゃんがね、ベラおばさんが来た時。必死に『なあ。くれんかのお？　ライフコンピューター。いいじやろ？

何でそう隠すのじゃあ・・・。』って言つてたの。Hルおあばあちゃんは、ライフコンピューターを付けてたんだよ！』

「嘘！あの時代はまだ世に広まってなかつたはずよ？」

ナイロンは一生懸命、無い知恵を働かして姉に説明した。

「だから、ライフコンピューターを作つたのは・・・力、力、ええいつ！ひいおじいちゃんだつたら？」

そのセリフだけで、弟が何を言いたいか分かつたウールは、すぐに外着に着替えると、クズグズしているナイロンに向かつて、早口で命じた。

「ロン。ウレを呼ぶのよー！後、チビちゃんも。ウレに連れてこせなさい！！」

慌てたロンは、一田散にウレの部屋に飛び込むと、わざわざ聞いたことを、そのまま言つた。

「ウレを呼ぶ。あ、今やつてる。後、チビちゃんもウレに連れてこさせなさい！だつて。ウレタン兄ちゃん。」

「はあ？お前は何が言いたいんだ。あのチビを俺が連れてつてやれつて？どい。」

「だ、だから。まひ。ベラおばさん家。」

と、言つことで、全員揃つたベラおばさん家では、ベラおばさんとの交渉が始まつていた。

「う、うん・・・け、けど・・・H、エルちゃんは・・・誰にも・・・み、見せるなつてH・・・。」

すると、今まで不機嫌だったウレ・・・ポリウレタンが、サッと前に出でてきて、はにかみながら説得にかかりつた。

「ええ。ベラおばさんは何も知らない。だから、いまから言つことにして頂けますか？」

「う、うん。H、エルちゃんの孫とは思えないわ・・・いいわよ・・・。どうしたらいいの？」

ベラおばさんは、年とは思えない美しさで聞き返してきた。だが、

ポリウレタンはその美貌になれてたし、自分自身も、美形なことを知っていたので、大して気にせず話を進めた。

「勝手にエルの孫が来て、自分はダメだといったのに、ウールが『借りるだけですから』と言い張り、さつさと盗んでいった。と。言

えばいいんですよ。ベラおばさん。」

ベラ・・・イザベラは、分かつたといつ様に頷いて、ライフコンピューターを渡した。

自分が言われたことに、疑問を持つたが自分が見たいといったので、しうがないと兄を見つめると、当の兄は、小声で『バーカ。反論しろよ。全部てめえの責任だぜ?』と言つてライコン（略してみた。）を持って去つて行つた。ロンは、姉の驅されやすい性格を笑うと、兄を追いかけて行つた。

『この子は、私とアーディュ・・・いえ、キュブラの間に生まれた愛娘。』ライフコンピューターはそんな始まりだつた。『この子の名前は、ポリエステルにしようかと思うの・・・だって、基本でしょう? 素材の中の。』こののろけ話を黙つて聞いてる、ポリウレタンではない。

「おい。こんなのどうでもいいだり? さつさと、問題の12歳へ飛ばそうぜ。」

「わ、分かつてるわよ! — そんなの! — 」

『ノメリコミタイプニヘンカイタシマス』

・・・ポリウレタンを除く3人がのめりこんでいった。

「また・・・。おいてかれちまつたなア。」

後に残つたのは、ポリウレタンの悲しみに満ちた声のみだった・・・。

プロローグ（後書き）

ちなみに、ポリウレタンは美形です。

厄日改め祭日

彼女、ポリエステルは人の気配に目を覚ました。

「なんていかねえんだよ！！エル。」

いきなり飛んできた怒涛が誰のものか分かるのに数分かかったえるは、寝ぼけナマコで聞き返した。

「あ・・・？何言つてんの。レーサー？」

言いながら、四方八方にはねた艶やかな黒髪をなでつける。仕草だけは色っぽいのだが、可愛らしく・・・といづか、子供っぽい羊のパジャマが台無しにしている。

「おまつ・・・！今日何の日か分かってんのか？」

エルは目の前に迫つてくるシンシンとした金髪を避けながら考える。ちなみに、レーサー・・・ウレイザアーハ茶色つ氣のかかった金髪が、上にどがつていることを利用した攻撃を得意とする。

「あ、今日はカルトドウヴーか。」

やつと思つ出したエルの目は、もう完全に起きた真つ赤に燃える目になつていた。

その眼を見て、少なからず怯えたレーサーは曖昧に苦笑いした。カルトドウヴーとは、元日とか、日の始まりなどの意味がある。銀河警察自由の言葉だ。

「ともかく行くぞ。エル。」

その言葉に、エルの表情が崩れる。苦々しけな顔で、皮肉る。

「レーサー。4年前に呼ばれちゃつたおまえには、2年間呼ばれてない私の気持ちは分からぬだろうね。」

「何僻んでんだよ。2年間呼ばれないぐらい、世間一般範囲だぞ。エルは悲しそうに笑うと、立ち上がつた。

「分かつた・・・行くよ。行くから、レディーの着替えまで覗くつもりかあい？」

途端に真つ赤になるレーサー。そして、やつさと退散する。

「お待たせえ～！…ベーラッ！」

ベーラッとふざけたように呼ばれたイザベラは、超絶美麗な顔をほころばせる。

「エ、エルちゃん……。き、来てくれたんだ。よ、良かった。」艶やかな金髪は、可愛らしくウエーブしてレーサーを魅了する。そんな様子を一人微笑んでみている男　　スタディが、ゆっくりと口を開く。

「そろそろ入らないとヤバいよ。みんな。始っちゃうよ。」

その声に3人は慌てて講堂に入る。

「では、今から銀河警察員発表会を行つ！…」

レイウッド第一軍隊体長は高らかに叫んだ。彼の茶色つ氣のかかつた金髪がふんわりと定位置に収まると同時に、歓声が上がった。何しろみんなが入りたがってる銀河警察なのだ。

銀河警察とは、銀河系から次々に送られてくる被害届などをもとに、銀河の平和を守る警察組織だ。1軍から10軍までにわかっている銀河警察は、組織長（イザベラのお父さん）によつてまとめ上げられており、新入りは1軍に入れられるのが通例だ。魔法を使った警護は、なんと隊員一人一人が『殺傷許可証』なんて言つ物騒なものを持つてるほどだ。

「名前を呼ばれたものは、速やかに立ち上がりステージへ順に並びたまえ。」

その言葉に回りの雰囲気が引き締まる。

「まず、今年は推薦入隊があるぞ。ホーム・ポリエステル。」

推薦入隊とは、組織長（ベラのお父さん）が、条件を満たしていくものなどを、ムリに入れることだ。

さて、ちなみに呼ばれたホーム・ポリエステル……エルは、物思いにふけっていた。

「これって、なんで条件なんてあるんだろ。生涯試験10級なん

て、40歳まで私ムリだと思うなア。ソーヤー推薦入隊てさ、レイウッド隊長もそなんだよね。てか、噂ではあの女顔にファンタム組織長が惚れたんじゃないか、つて話もあるよねえ。じゃ、ベラのお父さんてホモ？・・・無いな。確かにレイウッド隊長は、ベラと互角の超絶美麗だけどさ、そんなのに惑わされないと思つんだよねエ。なんつって、ベラに似たあの美しさ！－ホント、ミコージック家はいいよねエ。や。けどホントレイウッド隊長、美しいよね。なんで男に生まれちゃつたんだろ。あの女顔は、見るものを射抜いちゃうよお。腰まで降りる長い髪も、そのうえオールバックした前髪も、美しいんだよなア。男に妬いても仕方がないけど、妬いちゃうよねえ？

もう、何の話か分からなくなってきたとき、そのレイウッド隊長の怒涛が飛んだ。

「おい！－ホームポリエステルはいないのか！－！」

「はい！－あります！－スマセンした！－先生！－！」

エルが、自分が呼ばれたことに気づいて、いつも居眠りして怒られる時を思い出して・・・先生っとか言つちやつた。なんて、どうでもいいんだが。とりあえず、美しい顔をしかめてレイウッド隊長はエルに静かに怒つた。つもりだが、ほかの人には皮肉つたようにしか聞こえなかつたりした。

「速やかに、ステージに上りたまえ。誰が先生だつて？まったく。俺は隊長だ。覚えとけ。」

笑いが起こる。エルは、真っ赤になりながらステージに上がつた。エルは茫然んとしていた。いや、恥ずかしくもあつたのだが。推薦なんて、エリート中のエリートの証じやないか。だつて、過去推薦入隊したレイウッド隊長は、今第2位の地位だぞ。シーザー第2軍隊長だつて、推薦入隊だし・・・。

「夕食よ～降りてきなさい。」

一人だけのめり込めず、ただ見るモードにしていたウレは母親の声

に、にやついた。

そして呆けたように画面を凝視している兄弟を見ると外用の聲音で、話しかけた。

「ごめんね、僕。入り込めないんだ。だから君たちの分まで、夕飯食べてあげるね。」

町の女の子をたぶらかす、甘い声で呟いたウレはその日、ハンバーグを4人分食べたとさ。

厄日改め祭日（後書き）

ただ、ただエルはバカなんですよ？別に。変な思惑なんてありますから。

ちなみに、ウレ君は、めっちゃカッコいいです。レイウッド隊長に勝ります。や、レイウッド君は、可愛いからなんですけど。とりあえず、次行きまひょか。

隊長様は頭の悪い生徒に優しく教え続けた。

「・・・以下。おい、エル分かつてねえだろ?」「

「ええ!..レイウッド隊長つ!..まさかテレパシーまで使えるようになっちゃつたんですか?」

レイウッドの美しい女顔は、極限まで歪んだ。そりやあ。分かるだろ。窓の外を一心不乱に眺めてたら誰だつて。そんな思いを隠して、もう一度エルのためだけにかみ碎いた説明をする。

「あのな。吸血鬼と云う、生物が、今回の、獲物だ。ここまでは分かるだろ?」

「あの。吸血鬼ってなんですか?」

レイウッド含め、第一群の者は肩を落とした。その中には、レーサーなどの仲良し組もいるのだから、エルの見方などいはばずもない。「あんな、吸血鬼というのはだなア。人の、血を、通じて、生命エネルギーを、取ることによって、生きながらえている、動物だ。」噛み砕く口調に、幼稚園を想像した者は少なくない。エルは真剣に頷くが、レイウッドはハカセに対して『後で、マジに教えとけ。敗因がコイツになるとか最低だから。』と囁くほどの知識しか渡していない。

「いいか? 次、行くぞ。で、名前は、エドワード。エドワードだ。分かつたか?」

「えどーうど。ですね。はー!..メモしましたっ!..」

「するな。エドワードだつ!..誰がえどーうどなんて怪奇な名前をあげると言つた!..」

誰もが、やな役を押し付けられた青年レイウッドの身を案じながらも、ドアの方へ体を動かす。

「あ、エドワーズでしたか。済みません。きっと略称はエドでしょうね。」

「もういい。エドワードだなんて言つてもわからんだら?。そうだ

な。エドワードでも、エドワーズでも略称はエドだもんな・・・。「見かねたハカセが、応戦しようと思を乗り出した。

「ちなみにエドワードの略称は、エディですけど、関係ありません。話の本題は名前ではありませんから。それに、レイウッド隊長。関係ない我々は、帰つてよろしいでしょうか。」

応戦なのか、レイウッドを追い詰めているのか、どっちともとれるような話を切り出すと、ハカセは周りの隊員とともに、去ろうとした。質問は、形式なものだからだ。と、思つていたのだが。

「ああ。帰つていいぞ。オメエら。だが、ハカセとレーサーは残りやがれ。応戦しろこのバカのために。」

ほかの隊員たちは、飛びように帰つて行つた。しかし、ベラは帰り損ねていた。それを見かねたかのように、レイウッドが声をかける。「ごめんな、イザベラ。あの約束はまた今度にしてくれないか? 明後日とか。どうだ?」

「あ、あさつて・・・なら空いてます・・・すみません。では・・・ま、また。」

しどりもどりになりながら帰つてゆくベラが面白いのか、レイウッドは少し笑うと本題を切り出した。・・・もちろん、二人の関係についての揶揄は眼力で治めたのだ。

「この、エド・・・エディは、悔しくも、王家なんだ、細かく言うと、王子、なんだ。で、この人には、捕まえて、いいか?と、言つ、許可が、必要なんだ、ここまでは、分かるだろ?いや、分かるな。次行くぞ。」

質問をしようとしたエルを、レーサーが力ずくで抑える。そこに、ハカセが加担する。

「だから今度、王家に王様の許可をもらいに行くんだよ。エル。」「なんで、バカ一人捕まえんのに、王家の許可がいるんですか」エルはレーサーをよけながら、必死に尋ねる。だけど、レイウッドは軽く無視して次に進めた。

「許可が取れたら、エド・・・エディを、探し出して、捕まえるん

だ。了解？」

「ええ！！場所分かつてないんですかあ。」

甘つたれた口調にレイウッドが、軽く眉をひそめた。

「なんなら、お前に探す権利をやつてもいいぞ。被害届が出てから4日・・・これでどの惑星にいるかもわからんないヤロー相手に。」

「でも、せめてどの惑星かぐらいは分かりますよねエ。4日なら。それに、エドと隊長はお友達じやないんですか？」

イラついたためか粗い口調になつたレイウッドを、逆なでするようにエルの言葉は無遠慮に発される。

「それをどこで聞いた。ハリー・ポリエステル。場合にいつては吊るす。答えよ。」

「ちょ、こわつ！！ベラ！！ベラだよ。あ、ベラですよ！！なんか、エルちゃんだけに教えるけど・・・とか、言つてたような気がしますね。自分的には、そんなので私の口が封じられるわけもないことを知つての確信犯だろうと心得てますが。」

急に饒舌になつたエルは、自分を庇うよりも完璧優等生として名をばからせていく、ベラを攻撃することが楽しくなつたのか、調子に乗つて喋り始めた。

「何か、すんごい話の合つ仲だつたとか聞いてますよ。私一人で抱えるのは重すぎて・・・なーんてほざいてましたよ。アイツは。」かなりレイウッドの傷をえぐつたようだとエル以外の2人は察して顔を青くした。何せ、そのイザベラとの約束を蹴つてまで、教えてやろうとしたのだぞ？あのベラを！！蹴つて！こんなバカのために！–そして、そのバカに蹴つた相手を馬鹿にされている・・・最悪だ。なんてことは、エルじゃなかつたら誰でも分かることだ。しかも、本当に仲が良いならレイウッドは今回の逮捕を、喜んでやつてはいないだろう。そこを突くなんて。そんな空気を読んだのか、エルはさつさと帰ろうとした。

「あ。分かりました。今回の件は分からぬいたびに、ハカセに聞きますから。これで。」

「告るし決定。屋上に行け。レーサー『ライツ』をおそれる。ハカラセ繩は納戸にある。取つてくれ。」

レイウッドか。確か七宝・レイウッドだったか。ミコージック家の親戚、いや側近だったはずだ。

しかも、このじろは第一隊長らしいが今ではトップクラスの狩人になつており、74歳とは思えない手腕でメッシュヤ元気だと聞いた。別名『天のギロチン』。殺す時、無駄無く首を刎ねるからだそうだ。美しいと思つたことを覚えている。俺が、この世で美しいと思つてゐるのはあの人と、クレスだけだ。

あの人を見て、なんで『みんなは俺を世界で一番きれいだ』とかいふんだ？この人の前ではいらない自信がついただけじゃないか。と、悲観的になつたのを覚えている。老いていても美しかつたレイウッドさんは、スクリーンの中で光り輝いていた。

「あいつら昨日もだつたけど、今日も夕飯抜く氣か？厳しいダイエットだなア。」

「ねえ、ポー君。ウルたちどうしたの？ホントにダイエット？」

「お母さん。ポー君と呼ぶのはやめてくれないかな？」

ポー君・・・失礼、ウレは微笑みながら答えた。答えにはなつていが。

「ウル達は、まだ二階にいるの？いいえ。ウルはいいわ。リルだけでも一緒に食べたいんだけど。ママ、悲しいわ。」

「お母さん。今日僕は出かけなくちゃいけないんだ。チビちゃんを読んだら解放してくれる？」

「ママつて呼んでくれるなら解放するけど。」

ウレは頭を抱えた。この馬鹿つぶりは、おばあちゃん譲りだったのか・・・。

「ママ。解放してくれるかい？」

「心がこもつてないわ。ああ。今日はまづひとこの家にいてくれるの

ね。ママは嬉しいわ。ポリー。」「

心の中で『呼び名を統一してくれ……』と叫びながら、いろんな女を虜にしてきた笑みを浮かべて、粘り強く交渉した。

「ママ。好きだよ。今日家を抜けることを許してくれない?」

そんなウレを見ながらお父さんは、これでいいのか?と思つていたのであつた。

隊長様は頭の悪い生徒に優しく教え続けた。（後書き）

そうなんです。この家のパピーは無口なんです。あ、パパです。パパ。そして、エルはバカなんです。後で思い知りますよ。エルの馬鹿つぶりが気になつても気にならなくても続きをどうぞ。

ドラキュラ城に遠足だ

「今日から一ヶ月間、よろしくお願ひします。ガイドを務めます、ライと申します。」

ライは、片方だけ羽の生えた頭を、深々と下げた。そして、みんなの疑問の視線から必死に耐えた。何しろ、ライはまだ1～2歳の子供の様に見えたからだ。ただし、実際のところ彼女は17歳で会つて、1～2歳など侮辱するにも程があるというものである。しかし吸血鬼という者は悲しい生き物で、なかなか老けない。そのせいで17歳の若く麗らかな彼女は、1～2歳に見えるという屈辱に戦っているのだ。

「レイウッド隊長様！！銀河警察は、ガイドを雇う金がそんなにも無いのですか！？」

「ふん。自分のみぐらい自分で守りたまえ、ジャック君。」

思いつき皮肉で返したレイウッドだが、この小娘だと道案内も出来ないのでないかと、本気で頭を抱えていた。だって歩くのも不安定なのだ！…どうして安心できよう？

何よりも、ライはちゃんとした吸血鬼じゃないのだ。混血の吸血鬼。人間と吸血鬼の間にできた、忌子なのである。その為か、右半分に影響が出ている。右目は何があつたのか眼帯が巻かれ、頭に生えているはずの羽は左のみだ。牙も左のみ。

「五月蠅い！…進むぞ！…」

それから約9日間かけてドラキュラ城に向かつて歩いた。（この間ウレは早送りをしていた。）

そして、10日目。彼らは無事に中間地点『寿園』についた。寿園は、いつも修学旅行生を泊めている人間用の施設だ。今まで野宿寸前だったエルたちにとってはまるで天国だった。

そして夜（ウレは早送りをした）。

エルは猛烈な渴きと共に目が覚めた。何しろ、出て来る物出てくる物、すべて赤っぽかったので、怖くて水分が取れなかつたのだ。エルは周りの人を起こさないようにそろりと起き上がり、部屋から出て行つた。自動販売機求めて。あれならさすがに水ぐらいあるだろう。

「ポリ・・テル・・・あると・・・無いのです！！」

話し声が聞こえてきて、エルは不思議に思つた。なんたつて、今は夜中。エルが起きているのはまだとして、喋るほどの時間ではない。好奇心旺盛なエルは、話を聞こうと壁に耳を寄せた。

「フフフ。あなたは外見しか見てないのよ。確かに、あの子は力がないように見えるわ。でもね、青になつたあの子はすごいのよ。笑えるわ。すごい変わり方をするんだから。」

「私は外見で判断なんかしません！！キチンと、論理に導いた考え方をしていますっ！！」

「じゃあ、そんなにキンキン叫ばないで、笑えるものも笑えなくなつてしまふわ。」

「お願いします。見捨てないでくださいっ！！あなたしか、頼める人いないです。」

「ふん、見捨てたりしないわ。フフフ。面白い。あなたの血筋をわざわざ見捨てるほど私はバカじゃないわ。ヴァンパイアの混血ちゃん。」

エルは息をのんだ。片方の声の主が分かつたのだ。この鈴を転がしたような美しい声。エルは一人しか知らなかつた。ベラ。ミユージック・イザベラその人ではないか。しかも、赤バージョン。ベラは厄介な性格だつた。二重人格、一人の人に二つ以上の性格が一緒くたになつて表れてしまう性格。

厄介な事この上ない。ベラは、耳にかかっている愛らしいメガネをはずすと、目が真つ赤に（まるでエルだ）になつてしまい、どこまでも『笑い』を求め、『喜び』を求める冷酷人間になつてしまふの

だ！！（え？前後のつながりが見えない？知るか、本当の事なんだもん。）さて、ここでエルの好奇心はもつと掻き立てられた。ベラと話しているのは誰なんだろう？そう思い、勇気を出して小窓から覗いてみた。（エルは小窓の近くで聞いていた）

ベラはやはり赤だった。問題はそこではない。ベラの話し相手は、15歳くらいの少女だった。いくらエルが鈍くてもわかった。ライだ、と。もちろん身長は違う。年も違う。顔つきは微妙なところだ。でも、吸血鬼の混血なんて、ライしか知らない。少なくとも、ここにはライしかいない。さっき見てた人と同じ人とは思えないぐらい、神の色が変わっていた。腰まで伸びる黒のかかつた茶色の髪。眼帯で隠していた右目は、美しく光っている。（ヴァンパイアの目は光を吸い込み、反射しない）牙も、心なしか引っ込んでいる気がする。けど、服は同じだ。大きさが違うが。

「さて、今何時だと思っているの？早く寝ましょ、あなたと違つて私は昼型なのよ・・・。眠かつたら、笑う気力もなくなるわ。」

ヤバいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやば沢ヤバ子じゅんか！！

出て来るつ！！エルはそう思い、脱兎のごとく逃げ出した。自動販売機の方へ。幸いにもベラにも見つからず、自動販売機にも『ミネラルウォーター』らしきものがあった。

何回も、何回もベラに聞こうとした。さりげなく『昨日の夜、どこ行つてたの？』って聞いてみようと口を開きかけたが『ライと話してたの』と、答えられるのが怖くて・・・。

ベラには、友達がいなかつた。その綺麗な顔立ちにの横に並んだら見劣つてしまふからだと思う。私にも友達がいなかつた。ここ、銀河警察（神の家）では、神の色は茶色が通常で、黒なんてありえないつつうか、前例が無い状態なのだ。それで、怖がられ人格を無視した、外見だけの拒否を2人ともうけていた。ベラは私の唯一無二の存在。たつた一人の親友。幼い独占欲だろうが、私はベラに友達

ができるのが嫌だつた。私に向かつてだけ笑つてほしかつた。2人の時は少し滑らかになる話し方も、すべて大好きだつた。赤の時も怖くはあるけど、好きだつた。信念のある感じに憧れもしたものだ。

ヴァンパイア城についた時、ライは赤いスカーフを付けていた。 礼儀正しく別れを告げた。

「今日限りで、ガイドを終了させていただきます。今までありがとうございました。」

けど、エルはライの声も隊長の声も聞いてはいなかつた。赤いスカーフ。あれは『サー・ベルの破』。ベラとお揃いだ。ベラと！！あれは、ベラがお父さんから3歳の誕生日にもらつたもので、家庭科を滅亡の危機に突き落とす、危険なものだつた。あれは世の中に50個程度しかなく、ほとんどベラのお父さんが所有していた。使い方は、自由。頭の中で思い浮かべたものが、若干の魔力と引き換えに真野が出て来る便利なものだ。しかし、それを生業としている家庭科からすれば、面白くないのは必然だ。ベラにおふざけで言つてみたことがある。『それ、可愛いなア。頂戴よオ。ベラ。』けど、ベラは真剣な表情で返した。『お、大人になつたら・・・ぜ、絶対あげるわ。』と答えられた。それを、ライは首につけている。ベラは胸元でリボン結びをしている。

ベラは歩みだしていた。ヴァンパイア城に。足を踏み入れていた。もう、守る必要はない。前みたいに、『エルちゃん。』『、怖いよ。』とすがりついてくれない。

エルは、誰も守るでもなく、誰に守られるわけでもなく、一人で足を踏み出した。

彼女自身も、一人で歩もうとしたのだ。すがっていたのは彼女だつたのかもしない。

「ボーバー。お願い。今日は、外出許可するから。」

「ママ。僕は今日、外出したくないんだけど。」

「明日の分。許可するから。ウル達を呼んで頂戴。」

「行きます。ママ。もちろん。」

ウレは意気揚々と立ち上ると一階へ上がって行った。

アリキユウリ城へ遠足だ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。たぶん、次はオマケになります。

ウレの手が私の肩に触れた。カツと体温が上がる。ずっと触れたいと思ってた。触れられたいと思っていた。ウレの手が私に触れている・・・。嬉しいけど、嫌だ。なんでだろう?ウレの冷たい目が私を射るように見つめる。

「早く、降りてくんないかな?お母さんの非難が痛いんだけど。」「ウ・・・ウレが止めてくんないと、抜け出せないの知つててるの?」

「当たり前じやん。けど、愛らしい妹に3日も夕食を抜かさせるのは忍びないからね。」

そうだ。私は今になつて空腹に気付いた。だいたい『愛らしい妹』って・・・。恥ずかしいセリフをちらつと吐くんだから。好きなんだ。ウレは私にないものをいっぱい持っている。

「ウレ兄ちゃん!! 今日の晩御飯、何?」

ロンが無邪気に聞いている。

ああ。そうだ。ウレも昔はこんな子だった。妹の私から見ても、素直で優しいお兄ちゃんだった。だけど、それは兄が4歳の時に幕を下ろした。燃え盛る赤い目から光が消え、優しさが消え、冷ややかな鋭い目になつていた。自分がすべてを知らないと安心できない。そんな人に様変わりした。

一度、ウレに對して詰つたことがある。『そんなにも、何もかも知らないと気がすまなか!! そんなに、優位に立ちたいのかつ!!』ウレは静かに答えた。『お前に、この辛さが分かつてたまるか・・・。』『そうだよ。俺は優位に、頂点に立ちたいんだ。』こんな人、知らない。私の第6感は危険を知らせた。

私の愛した兄は、もういない。
変わってしまったのだ。

けど、好きだ。私は自分の気持ちに震えが走った。まだ好きだった。
前より好きだった。

前編 女子力

だつて彼を変えたのは、この私。

私たもの

ひいお爺ちゃんの、お葬式の次の日だつた。あれは。ひいおじいちゃんは、ライフコンピューターの創生者で、この星で初めてライフコンピューターを使った人で、短く編集したライフコンピューターをお披露目することになつたので、私たちは、披露宴の席に座らされた。

「ねえ。おひちさん。なにがはじめるの?」

「川 聰がほんから面白いものが見れるんだよ
「おもしろい? 亦シト? ウル、 楽しみい!!!」

「黙つて、画面を見るんだよ。」

ひいお爺ちゃんのハイフロンジャーは、普通に面白くなかった。すると、耳につく鳴き声が聞こえた。ふつと振り向くと、泣いていたのは兄だった。

私はなんでだらう、と思った。初めて兄が泣いているのを見たが、泣く理由が分からなかつた。そこで、お兄ちゃんに聞いてみると、

「ねえ、おにーちゃん。なんでないでいるの? あんなのが」わかつたの。へんなおにーちゃん。」「

私は、悪意などなかつた。お兄ちゃんに恥をかかせるつもりなど、3歳の子にはないに決まつてゐる。けど、悪乗りしたいことが叫んだ。

「ホントだよ！…ポリウレタンは、ビビりだな…ダッセえ～。」「気持ちわりい！！』ママア』だつてさあ。」

いとこや、はとこがそろつてポリウレタンを馬鹿にした。

それを黙つて見ている親たちでは幸い無かつたので、兄は救い出された。そして、出る寸前に私のことを鋭くにらんだ。それは、今のがうな冷ややかな目だった。

ああ。変わってしまった。変えてしまった。変わるきつかけを作ってしまった。

「おい、ウル。また、ライフコンピューターに入りこんじまつたのか？」

「ウレ・・・。入り込まないタイプは、面白い？」

「なんだ？ 嫌味か？ それは。後にしてくれよ。今日は、オムライスだぞ。」

そう、後で分かつた。ウレはまれにみる、入り込めない人だつたのだ。それで、皆が『あんなの普通じyan』と言つている時『あんなの』が分からず、分からぬ恐怖に苛まれていたのだ。それで、彼は巷で『情報屋』名を馳せる人になつてしまつたのだ。情報はすべての上に立つと、情報を持つている者こそがこの世を征すると…。

私が変えてしまった。

ならば私がその罪を負い、私はこの人を好きでいつづける。

それが私の罪滅ぼしだから。

オマケ（後書き）

ウレ君が変人なのはこんなわけがあつたのです。一人とも思いつめ
ちゃうタイプですから。次回はちゃんと本編ですから、ご安心を。

ドラキュラ城の王様は

「悪趣味。」

「そ、そりかな……す、凄い可愛いと思つけど……。」

エルはリボンで括られた骸骨のモデルを持ち上げながら、不満そうに言つた。だが、何度もドラキュラ城に来た事のあるベラは、なんとも思わないようだ。

「本氣で言つてんの！？じゃあ、この棺桶の様なベットせどりの悪つ！」

「ちよ、ちよと寝づらこかな……？」

「ちよつどじやないわよ！人間のこと総無視じやないつ……この部屋。」

「そ、そりやあ……に、人間のままここに来る人なんて、滅多にいないから……。」

エルは目くじらを逆立てた。寿壯での大部屋と違い、2人部屋のは嬉しいけど、悪趣味すぎるところからエルは文句たらたらなのだ。馴れているベラにとつては、五月蠅いことこの上ないのだが。

「もういやー。あ、そうだ。レーサー達のところに遊びに行こうよ！…」

「「ごめん。私は隊長に呼ばれているから。」

「そ、うなんだ……。じや、暇になつたら来てね～。」

ベラは、エルが言つた途端真顔になつた。ベラは極度の人見知りなだけで、ドモリ癖は無いのであつた……。そして、メガネをはずした。

「入つてきていいわよ。レイウッド、ケイト。」

「「光栄だね。気配だけで察してもらえるなんて。」

ケイトは御年650才だとは思えない若々しい言葉で返した。

「イザベラ。悪いがさつさと話しあませてもいいや。なにせ、お

前の立場は面倒くさいからな。実質副隊長さん？」「

「いいじゃない。裏番みたいで。面白いわ・・・。」

「ドリキコラの王よ。面会の許可を銀河警察1課第1体隊、隊長の名を持つて要する。」

「許可しよう。そんな、硬い表情をするなよ。レイチル。俺とおまえの中だらう?」

周りがざわつく。ヴァンパイアの友達がいる人なんて、珍しいにも程がある。しかも、レイチルだつて?彼は、レイ隊長と呼ばれることがさて、嫌がるほどレイウッドといつ名前に誇りを持っているのだぞ!?

「いつの間にそんな仲になつたんです。ケイト様。あと、何べんも言つてますが私のことはレイウッドと呼んでください。」

「つれないなア。レイチル。俺は悲しいぞ?」

やはり勝手に言つていたのかと、周りは安心した。我らが隊長がヴァンパイアに食われたりでもしたら、我らの死を意味するのだから。「さつさと本題に移りますよ。エドワードの捕獲許可を下さー。」

「いいよ。けど、15日間ならね。」

「半年と考えていたのですが・・・。」

「ごめんねー。レイチル。俺も君のためなら息子を縄にかけるのは何とも思わないんだけど。さすがに一国の王子が半年もいなかつたら、政治に響くんだよねえ?」

「それは承知の上で・・・。そもそも、あんたのとの息子が一日で500体も食り食つたからいけねえんだろ!?」

みんな息をのんだ。500体・・・?しかも、この王の機嫌を損なわせるようなセリフを!-!隊長つて奴は!-!馬鹿野郎つ!-!しかし王の反応は、皆が予想していたものとは大幅にずれていた。

「怒った顔も可愛いぞ。レイチル。しかしなア。奴も、もう400歳だぞ?確かに。親が食事について、シャリシャリ出る年ではあるまい。」

「350才だろーが。さらっと50年間違えるなよ。そんなこと言

つて、500体ってなると口出してもいいぞ。絶対。」

「まあまあ。ちゃんと僕から言つておくから。15日にしてん?」

「無理。さすがに短すぎ。」

「けどなあ・・・。難しいんだって。そろそろ俺、死にそうだしい
」。

「バカ。知つてんだぞ。最低でも1000年は生きるってこと。それ
に、せめて1ヶ月でどうだ。」

「いーよ。1ヶ月で手を打とつか。」

みんなは、深いため息をついた。もともと、半年の予定でここまで
て、1ヶ月で手を打つはめになるとは

・・・。

「隊長と、副隊長そして、隊長補佐はここに残つてもらおつか。
エルたち平は面会場から、追い出された。

「しかし、ひでえよなあ・・・。1ヶ月つて。俺たちは山、半年つ
て言つてんだぜ!？」

「ねえ。少し、不平等だよね・・・。それに、べラまで残されたの
が、気になるな・・・。」

「どーせ。俺たちは、いらねえよつて。」

「あ、そーだ。二人とも聞いた?エディの場所、割り出せたんだつ
て。」

「全然関係ない話だな。また。エドワードがどうしたつて?」

「あのね。エディは・・・チキュウって星にいたらしいよ。」

「なんでその地球とやらにいたんだ?」

「何でも、文化的に劣っているから、『むぼーび』なんだつてえ・
・。『むぼーび』って何?」

「吸血鬼に、対抗できなってことだよ。後、無防備ね。」

聞いたくせに、2人は適当に聞き流した。

「ふう。わざとらしかったなア。レイチル。やつぱり。」

「ケイト。勘弁してくれよ。みんなの前では、レイウizardって呼んでくれってあれ程……！」

「早く本題に入つてよ。私は、お友達おっぽり出したのに……。クスクス。」

「とりあえず、その血の詰まつたタンクの意味を聞こうか？ケイト。」

「プロジェクトAだよ。」これが。

「血を大量に集めて、じつするつもじつがぶ飲みでもしたいのかしら。フフフ。」

ケイトは悲い顔をしながらうなつた。そして、レイウizardの方を向いて一言。

「お前の、その清らかな唇に誓つて……」コイツに真相を話していくんだな！？」

「ああ。この唇には誓わないが、イザベラに話しても支障はない。絶対ない。」

「えー。裏切つたらお前の唇を奪おうと思つたのに？」レイチエルうー。」

レイウizardは、いまにも蹴りださんばかりの表情で、断言した。

「早く言え！お前のその行動が、遅々として進まない原因なのだから！」

「分かつたよ。けど、怒りは皺の原因だよ？レイチエル。お前ほどの美人に皺は似合わない。」

「うわー。やつさと叫んだ。」

「はあーー。うちの、民は血に飢えている。金がないと血を手に入れられない、社会になつてしまつてからだ。その為、共食いも少しづつだが広まりつつある。このままだつたら、町が血の海になつてしまつのも時間の問題だろう。それで、ある日、このタンクの中にある血を、皿にぱらまこつかと思つてているんだ。今も、もう配給制度はしているんだけど、僕たちにも食べる量というものがあつてね。全部をあげる訳にはいかないだ。だから、血がいる。そういうてエ

ドワードを話したわけ。それだけだよ。」

「ハドワードは市民のために血を集めているわけね……。フフフ。

面白いわねえ。」

レイウッドは涙ながらに、話しかけた。

ブチッ

「ポタン。私と遊ぶ約束忘れたとか言わせないわよ?」

「忘れてなんかいなーさ。クレス……そんなに怒らないでくれよ。」

「その美しい笑顔に一瞬くらうと来るが、クレスはまだ怒っていた。
「バカつ！…忘れてないなら、なんで1時間もつ・・・またせつ・
う。」

最後らへんは泣いてしまったクレスに、美しく語りかけるポリウレ
タン（呼び名を一つにしてほしい）

「ごめんね・・・。つい見入ってしまって。」

それが、起爆装置だつたのだ・・・。

「バカつ！！エルさんに見入るなんて・・・私という存在がありな
がらつ！…ポタンなんて大つ嫌いつ！今日のリーレはお預けよ！」
ポタンは、一人さびしくつぶやいた。

「エ、今日はリーレなんかしないんだけど・・・。」

アリカラ城のH様は（後書き）

初めて登場しました。ケイト様。また濃いの出しあがけたもんです。はい。レイウッドとの間には、何にもありません。前に、少し世話になつたんですって。あと、クレスちゃんも初登場ですかね。可愛い子ですよ。あの子は。

「汚いッ！！」

「ゲホッ！くせえ～よ。なにこれ？」

「排気ガスだよ。成分は主にCO₂なんだ。」

「へ、へえ。で、でも、この箱は面白いね。ひ、人を運ぶ箱・・・初めて見た・・・」

みんなは、ニッポンという国の道を歩いていた。みんなと言つてもレイウッド隊長と4人組なのだが。

そして灰色の煙（？）を盛大にあびた後のセリフなのだ。

「それにしても誰も飛んでない・・・。へんな星だ。体もチョット重いし。」

「だ、誰も飛ぶ能力を持つてないのよ・・・。レーサー。」

「重力も7・5倍なんだよね。これでチョット重いで済むなんて、さすが適応ガムだね。」

地球適応ガムというガムを噛んできているため、ここに空氣にも慣れているはずなのだが。みんないといこ育ちなのでやはり気持ち悪い様だ。

「早くついて来いッ！－－遅いんだ。お前らは。地球の事なんて座学で習つたるーが。さつさと行くぞ。」

レイウッドを含め皆さんはかなり正確に分かつたエドワードの場所周辺を、くまなく探すことにしてたのだが。新人ということでレイウッドがつくことになり、ふつう4人グループの所を5人グループにしてもらつて行動中だ。

「イザベラ。瞬間移動使わないと？」

「え・・・。レ、レイウッドが決めて・・・？」

「・・・調子狂うな。青の時。・・・外していいか？イザベラ。」

「やつ・・・と、友達の前ではあんまり・・・け、けど。レイウッドがして欲しいなら・・・ど、そっちでも・・・いいよ？」

レイウッドは少し顔を赤くしながらもベラのメガネをはぎ取った。ベラの目はレイウッドの赤い頬など目にも入つてないような感じでキリリと前方を見据えていた。

『「コチラトウホクチホウチョウサグループエドワードハミツカラナカツタキンキチホウグループハドウダッタカ』そこまで打つてレイウッドは顔をしかめた。この通信機はこの固い文字しか打てない・・・しかも句読点などが打てないときた・・・。

「レイウッド。終わつたかしら? フフフ。ゴウさんの事気になる?」「お前はそういう言い方しかできないのか。・・・気になるけど、

近畿地方。」

「ははは。素直じゃないわねえ。」

エルはレーサーと顔を見合させた。いつからこの2人はこんなにも仲良くなつたのだろうか?

「あ。返信來たぞ。」

『「コチラハソレラシイドウクツハッケンゼヒキユウゴラネガイタイキュウシユウチホウモチユウブチホウモヨンテクレホカノハイイカラ』

「ん?此方は其れらしい洞窟八件。是非久吳を根が痛い。急襲痴呆も虫部痴呆も四で繰れ。どーゆー意味?レイウッド隊長

「エル。頼むから黙つて座つといてくれ。」

そして真剣な顔をするトレーサーとイザベアの二人にコショコショ喋り、ハカセを呼んで細かく何かを書き留め始めた。エルはきちんと黙つて見ていた。そしてレイウッドは日付が変わる寸前に叫んだ。「できたーッ!!」

「何ができたんですか?レイウッド隊長。」

「もちろん、エドワードがいる場所検索を近畿地方周辺だけに絞つて検索したらエドワードの居場所をみつけ出した。さて、お前は何も知らなくていいんだ。忘れる。今言つた言葉。」

さて、ここは近畿地方の三重県の山の麓にある洞窟の・・・10メートル前である。周りにはバリアが張られ、魔力を持たない物は見えないようになっている。だから、銀河警察の人々には丸見えなのだが、入れるのは入れないわけだ。

「俺が行く。」

立ち上がりて咳いたレイウッドは、副隊長に指揮を任して進んでいった。しかし、頼まれた方の副隊長は憚いてレイウッドを止めようとする。

「どうやつて行くんですか！？バリアを壊すなら専門家がいますつ……」

「うるさい。バリアぐらい壊せるサ。」

「無理です！？これの強度はバカになりませんつ。」

そこで立ち上がったのはゴウ近畿地方捜査軍隊長・・・まあ、副副隊長あたりのポストに普段はいるけれども。

「俺も行くよ。レイチャエルみたいな女の子に一人で行かせるなんて男が廃るよねえ。」

「うぜー。女の子じやねえし。レイチャエルじやねーし。」

「俺はバリア破りの専門家だけだ。いいかな？副隊長。」

「いいけど・・・。ゴウ。お前専門家だつたっけ？」

微笑を返したシーザーさんは、この件で副隊長に任命されたという・・・あとの話だが。もちろん。

「開くぞ。あ、間違えた。ひらくかも〜。」

「そろそろ真面目にしろゴウ！！」

二人はギャアギャア言いながらあんなに難しいと言っていたバリアを抜けていった。

みんなは目を凝らしてみていたのだがなんで開いたかさっぱり分からなかつたし興味本位で触つた隊員はやけどをしたため、誰も近づかなくなつた。

「さて・・・。レイウッド隊長とゴウが行つたため私たちは、ほかの隊員を集めてこなくてはならない。と思うから。みんな、散れ

つ！！

グダグダな指令に嫌な顔をしつつ、隊員はほかの支部を呼ぶため飛び回った。 のだが、残つたのはエル率いる新人組。

「あのー。副隊長さん。私たち。ビーすればいいですか？」

「ここいら辺で見張つとけ。洞窟。」

「レイウッド。どうしよう。俺ホラー系の映画駄目なんだ・・・。「奇遇だな。ゴウ。俺も今そう言おうと思つていたんだ。俺はホラ一系の小説が駄目ンダヨねー。」

彼らが気軽に話し合つている前には女性から男性まで成人あたりの死体が山積みになつっていた。で、現実逃避が始まつたというわけだ。入つてすぐ死体の・・・しかも血を完全に抜かれた死体に会うとは思つていなかつたのだ。（いや、思つてゐるわけないが。）

「さて、これでエドワード、もしくは別の吸血鬼がいるのは確実だねえ。」

「いや、死体置きかもしんねーぞー。つーかさあ。これもうバラバラ死体だよなー。」

「レイチャエルー。俺が推理小説ダメなの知つてんだろー？」

「あ、頭悪いからな。考えられないんだよな。つーかレイチャエルつてゆーな。」

二人は死体置き場（？）から軽快な足取りで離れるときりに奥に進んで行つた。

その時だつた。

外でバリアが取れ洞窟へ進めるようになつた。エルたちはびっくり仰天して副教官へ通信を打つた。（ハカセが）だがみんながみんな地方へ散らばつていたため集まるのに1時間かかつたというのは余談だが。

そんなことは全然知らない2人はとうとう踏み入れてしまつていた。

バンパイアの巣に。

「・・・女の子だね。レイチャエル。きみよりはかわいくないね・・・。
あの田はキライだ。」

「ももと」「コウは強い女の子はキライだろ?んじゅあ。ムリだと思つ
よ。付き合ひのは。」

「え・・・。レイチャエル。俺さすがに吸血鬼とは付き合わないっ
て・・・。」

その子は微笑を浮かた。年は5~6才だろうか?レイチャエルほどではないけれど・・・。ビックリは言つが同じぐらい綺麗な女の子だった。彼女はゆっくり口を開いた。

「待つてたよ・・・。悪魔ちゃん。と誰かしらあ?外にいる子達も一緒に来ればよかつたのに。」

「怖一。メッチャ怖一。吸血鬼怖一。」

「ポタン。黙つて見れないの。てか、キャラじゃないよ。その怖が
り方。」

クレスの言に分にポリウレタンはこり笑つた。・・・うん。こ
りや怖がつてないな。

地球（後書き）

クレスちゃんの本名は「ジョージック・クレッシュンド」だつたりします。ゴウの本名は「プロッサム・ゴウ」だつたりします。副隊長は「ワイ・ザール・ジック」とかいう。え？ 金で、ゴリ押ししたんじやないかつて？ 何でわからんの。この人は金で副隊長になつたりしてます。だからへたれなんだよねー。ん？ エルの出番が少ない・・・？

マリア様

彼女は美しかつた。（ええ。レイチエルよりかは・・・以下略）目は真つ黒で光ない。髪の毛は艶やかな黒髪でその上に黒く美しい羽根が居すわつており、やせ氣味のほつそりとした体にはぴつたりとした黒い服をまとつていた。

「悪魔ちゃんつて俺の事？マリアちゃん。久し振りだねー。」

「久し振り。似合つと思わない？悪魔ちゃんつて名前。」

「似合わないと思うよ？俺一応天使ちゃん側だからね。」

レイウッドもマリアも二口二口と今から対決するとは思えないぐらい明るく喋つている。ちなみについていけないゴウは横で笑つていた。

「悪魔ちゃん。私ね。お兄ちゃんに頼まれたの。レイチエルを生け捕つて来いつてー。けどね。悪魔ちゃん。私。悪魔ちゃんの事さあ。」

マリアがレイウッドを見てヒヒヒヒ笑つたため、レイウッドもつられて笑つた。

「だあいつ嫌いだか生け捕りなんか出来ないかもーつて。思つてさあ。」

笑いながらレイウッドに近づいていくマリア。引きつり笑いを浮かべたレイウッドは呟いた。

「ゴウ生け捕つてくんないかな・・・。」

「キヤ

「死体！？気持ち悪つ！！」

「血い抜かれてる

！！吸血鬼だ

「うん。だから吸血鬼の巣に来たんだからねー。合つて当たり前なんだよー？」

ハカセが微笑みながら泣つてゐる女の子たちをあやす（？）

「お前は冷静だな。ちょっとは恐がれよ。」

「怖いよ？」

全員、ギヤアギヤア言いながらそこを足早に通り抜けて行つた。

「お友達が来たみたいだねー。悪魔ちゃん。じゃあ、そろそろ死ぬー？」

お方達は血奴いなんてな
手をもてに生き残ることにす
るサ。」

と思つた。」

「けどな、お前。絶対隊長が死んでる姿も見たくないとと思うぜー？」
二人ともおちやらけていぬがゴウもまじつで戦いの真つ最中だつたりする。ちなみにレイウッドは創建でマリアは・・・え？「ウモリ？血ですか。なんかいろいろ飛ばしちゃつてるようです。そんなわけですから、返り血的なを浴びてグッチョグッチョになつてるわけなんです。そこに皆さんが到着して・・・。

「隊長が死にそ॥ー!!」
あやあ

ねはー

「だれが死ぬかあーー黙れっ。クレンとスズカかーー!?」

名前覚えてくださいてたの

さて、わき役のくせに日本語おかしくなつてゐる女子どもは置いとい
て確かにレイウッドは血っぽいものに囲まれて血っぽいものでぐち
やぐちやなわけでして。かなりグロテスクですね。描写なんかしま
せん。

「よーや見しちゃダメだよー？悪魔ちゃん。」

「アリサちゃん、後ろの子たちには攻撃しないのー?」

ପ୍ରକାଶକ ନାମ : ପ୍ରକାଶକ ନାମ :

その途端後ろの子たちに向かって血っぽいものが降ってきた。

「エル。ヌンチャク作つて。レーサー、スピード。ベラはラッパ。」

手に意識を集中させるエルと、体中から青いオーラが出て来るレーサー、そしてベラはラップを高らかに吹いた。（ちなみにハカセは司令塔）

その音で戦いが開始された。エルは1秒でヌンチャクを出すとレーザーにほつた。そしてスピードをあげたレーサーは素早く血つぽいものを薙ぎ払つてゆく。ベラの弾く音は『滅』を意味するので聞こえた血つぽいものは次々消えていった。

「あー。違うや。バリア張つて。エル。」

エルはすっと掌に力を集めた。少し魔法の説明をすると、今エルが使っているのが一般的にいう家庭科。しかし、作るのは大気のあらゆる成分を使って作りたいもの的具体化するためにちょっとばかしの魔法を使うわけだから別に何もないところからポンッと出すわけでは無い。

バアアアアアアアアアン

「フヒヨ！？ ビーした急に。」

目の前に突然鉄の壁が現れたためビックリしたレーサーが叫んだ。

「妥当な判断ね・・・。フフフ。レイウッドは10分前に張つてたわ。」

「ねー。あの入バリア張れるんだ。」

ひとまず血つぽいものから逃れられてほつとした雰囲気が流れる。

「ねえさー。何でバリア張つたの？」

「あのね。なんかマリアとかいう女血の蓄えがメツチャあるみたいでさ。すんごいいっぱい血つぽいもの流失してたからね。こりゃこつちが先に倒れるなーと。ほら。魔力にも上限つて物があるからね。」

「へえー。私周り見えなかつたよ。レイウッド隊長以外にバリア張つてた人いた？」

「・・・周り見えなかつたの？あーいたよ。いたいた。あのゴウさんのパートナーのサー・シャも張つてたかな。あ、もちろんゴウさんも入つていたよ。」

「サー・シャさんかあ。綺麗だし頭いいもんねー。」

少しばかりの団欒が血っぽいものの残骸の上で生まれている。奇妙な光景だ。

バリイイイイイイイイ

「悪魔ちゃんから開けようと思つたんだけどねえー。あんたたちのが一番破りやすそだから来ちゃつたあー。」

「悪魔ちゃんてレイウッドのこと・・・?面白に呼び方ね。吸血鬼ちゃん?」

「ふーん。綺麗な子だねー。さあ、どうやって料理しようかなあ?」

真っ先に立ち上がつたベラが前に出でいる間。エルはショックで頃垂れていた。あんなに頑張つて張つたのに!?.敗れるの絶対早いよーー!

「どうやつて割つたか教えなさい!..!..

エルがベラの前に躍り出たときそれが起つた。光らないはずのヴァンパイアの黒い目が青く光り、さつきまで上からだつたマリアが泣き崩れた。

そして・・・エルが倒れた。

「ねえ。レーサーさんとベラさんってくつつかないかなー。」

「んー。無理。たぶん。」

「ポタン冷たい。だつて、レーサーさんカツコいいよお?それにベラさんも綺麗だし。」

クレスとポタンはまたまたポタンの部屋でこれを見ていたりしている。描写はしていないがドロドロの戦闘シーンの途中で切つてまでしてこんなのかんな会話をしている。

ふーん、と呟いたボリュレタンは笑顔でクレッションドに近づいた。

「レーサーさんがカツコいいねえ・・・。」

「「」・・・「」めん。え？あ・・・ポタンの方がカッコいいな～。」

「うん。ベラさんよりクレスの方が綺麗だし可愛いよ。」

真っ赤になるクレス。そして今までメッシュチャクチャ近かつたポタンの顔がさらに迫ってくる。

と、そのとき。

「ポタン兄ちゃん！…いつまでおばあちゃんのライロン占領して…・つー？」

「ロン…失せろ。こら。親の前じゃねんだから。失せろ。バーカ。」

「「」めんなさー！？わざとじゃないのやつ～。」「」「」「」「ゆつくりいいいいー！」

だ
つとかけて行つたロンをしり目に一人はキスするわけにもいかずに顔を見合させた。ロンはなんとクレスの婚約者？許嫁的な感じなのである。親ぐるみの付き合いなのでそつなるのは仕方がないといえど・・・なぜ俺じゃないつ！？と・・・ポリウレタンは叫び続けている。心の中で。ええ。心の中で。付き合っているところを親に言つていいわけでもなかつたのが敗因である。「なあ、断ろーとか思わないの？俺的にはさあ。親の前でラブラブなお前ら超むかつくんだけど。」

「けど・・・私はポタンが一番好きダヨ？？」

玉砕。

マリア様（後書き）

楽しんでいただけたでしょか？はい。そうです。エルの登場がすごい少ないんです。レイウッド出すつぱりなんだよねー。
レーサーも出てないし。ハカセはキャラ濃いからまだいいんだけど。
ベラ？はい出すつぱりですね。

記憶（前書き）

これは少しきつい言ひて本文に関係あるひでないあります。まあ、飛ばしてもかまいません。だから新しい方は飛ばして次へどうぞ。

美しく揺れる花々・・・に囲まれているお兄様。
エドワード。

貴方は私の憧れの君。
そうアイツが来るまでは・・・レイチャエル。いや、レイウッドとい
うんだつけ?
私のお兄様を返してよ。

悪魔・・・。

「君がマリアちゃん? へえー可愛いね。ねえ。レイチャエル。」

「うん。とっても可愛いと思う。マリアって名前も可愛いわね。よ
ろしく。」

最初に喋ったのがミュージック・ファンタムさんで次に喋ったのは
ミュージック・レイチャエルさんだと名乗った。可愛いという二人こそ美しい顔立ちでよく似ていた。重力が5倍の星であるこの星に適
応ガムなしでの訓練をしに来たという。

「・・・ありがとう。一人ともはじめまして。」

緊張しながらもおどおど喋った私に対してレイチャエルさんは優しく
微笑んだ。

「久しぶりだね。エドワード君。相変わらず美しい顔立ちだ。」

前にも何回か訪れたことがあるというファンタムさんはお兄様に話
しかけた。

「ええ。お久しぶりです。何年ぶりでしょうか。あなたはちつとも
変わらない。」

「それを吸血鬼に言われるとはね。妹ちゃん、可愛くて仕方がない
だろう?」

「田に入れても痛くないですよ。」

あつたりと私が可愛いことを肯定するお兄様。カッコいい。

一人の旅人が来たことによつてお父様も嬉しそうだつたし、お兄様もイキイキとしていた。

私も幸せだつた。その日までは。

血の匂いがする。

かぐわしい香り。欲しい。でもこんな昼間になんで血の匂いがするんだろう？

「お兄様の匂いもする・・・」

私は血の匂いのする方へふらふらと近づいて行つた。氣づくと私はお兄様の部屋の前にいた。中は少し騒がしい。

「お兄様・・・どうしたんですか？血の匂いがあれ？お父様まで。」

「マリア。起きたんだ。あんまり見ない方が良いよ。欲しくなる。」

けど私にはもう見えていた。首筋の周りが真っ赤に染まつたレイチエルさんを抱いているファンタムさんの前に立つてお兄様が。。。

「お兄様が食べちゃつたの？」

「マリア。顔が蒼くなつてきてるよ。ここは血の香りが充満していく気持ち悪いだろう？一緒に出よう。私たちには刺激的すぎるしね・・・」

お父様が今まで見たこともないような真剣な顔で私の手首を引っ張つた。嗚呼。逆らつてはいけないんだ。いくらお兄様の血だらけで真っ赤になつてている顔に光る涙を見つけたとしても・・・。

翌日。お兄様はいなかつた。

「お父様ッ！お兄様が・・・お兄様がいないわ。香りが消えてるッ。」

「出て行つたよ。なにやらい星を見つけたらしいぞ。んーと、桔梗だつたかな。あ、地峡？だつて。ファンタム。」

「地球だよ。ケイト。あれあれ。マリアちゃん。泣いてるの？」

「お兄様・・・私に、何も言わずに、出てったのね。お兄様・・・私の、ことなんか、どうでも、よかつたんだわ。お兄様は・・・私の、」と、嫌いなのよ。」

喘ぎながらやつとそれだけ言つと私は自分の部屋に走つて行つた。すぐにお父様が駆けつける。私の部屋には鍵がかかっているから外から優しい声が聞こえてくるのが分かる。

「マリア。エドワードは君のことをずっと気にしていたよ。けどね。私が言つたんだ。『マリアにその血濡れた体で会おうと思わないでくれ』とね。私が悪かったよマリア。」

「嘘・・・ッ！お父様はそんなこと言わないでしよう？お兄様も私のことを気にかけないわっ！！」

「・・・ばれたか。そう。お父様はそんなこと言つていない。けどエドワードは言つていたよ。『マリアのことをよろしくお願ひします。父上。私にはもう会う権利はないですから。父上も。またいつか会えるといいですね。さようなら。』とね。これはホントだよ。私は泣けてきた。心の中で言葉が暴れる。そんなことお兄様が決めることがじゅ無いのに。お兄様に会いたいよ。会いたい。会いたかったのに。私は会いたかったのよ。お兄様。

「もう一つ言つていた。『次会つた時はお兄様と呼ばないでくれとマリアに伝えといてくれる？父上。次会えるとは思はないけど。もう、そんな尊敬できる吸血鬼じゃないからね。』とも。お兄ちゃんにしたらどうだ？」

オーライチャン。アナタハモウ『お兄様』ジャナイ。

「吸血鬼の性だよ。『めんね。巻きこんじゃつて。レイチャエル。』やめて。」

「まつたくだ。俺はただただ修行に來ただけなのに。」
「あはは。やっぱり好きな人の血は欲しいよねー。美味しかったらしこしー。」

「俺にそんな趣味はねえ。それに噛む氣か。返り討ちにしてくれる。」

違つ。お兄ちゃんはそんな人じやないの。

「もー。女の子の時はチョー可愛かつたのにい。その方向の才能あるんじやない?」

「俺はなあつ!! 女の格好だとさらに男に戻つた時の筋力が倍増するつて聞いて女になる薬飲んできただーつ!! その趣味はねえつづうーの。」

「で、吸われたから元に戻つちゃつたってわけ。」

「かな? 一日あいてだしなア。わかんねえや。」

「けど、Hドワードも吸い過ぎだよねエ。ファンタムがいたからよかつたけど下手したら死んでたよ。ツ。それに、若干はだけてましたけど何してたんだ? 僕の息子に。」

お兄ちゃんをビリするのよ。あとから悪口いうなんて。

「された方だつづーの。てか、あんなア。俺たちはふつーに会話してたんだぞ? 昼間だし。なのにさあ。人が親切心でお茶を入れたろ思つて背え向けてたら後ろからガブリでさ。いつたいもんだから振り払おうと思つて動いた余計拘束されて脱がされそうになつた時ファンタムが入つてきてくれて。血は吸われるわやられそうになるわで最悪だよ。」

もうやめてよ。

「やらしい会話してたんじゃないのー。」

「するかッ! - こつちは男だぞ。なんか政治の話してたよ。」

騙したのはそつちじやない。

「いやいや、まあお蔭でやつとパートナーに参加してくれたしあ。ありがとーね。レイチャエル。」

「レイウッドだッ。PTT?なんじやそりや?」

「んーと『プロジェクト・食べて食べさせり』PTTだよ。」

「意味わかんねえ。あのさあ。Hドワードに会つたらよ、俺は怒つてないから。騙して」めんな。つて言つといくんないか?」

「頑張る。」

レイチエルと騙っていたのに。レイチエルなのに。男の声でお兄ちゃんに喋らないで。

「レイチエルさん、つてこれからも呼んでいいですか。兄の代わりに。」

「え・・・。ま、まあいいけど。マリアちゃんは辛くない?」

なんでそんな。なんでそんなことを。なんで分かっちゃうのよ。なんで一番分かつて欲しくない相手が一番最初に分かっちゃうの。

「マリア。エドワードは別にレイウッドを恨んでないぞ。もう好きでもないだろ?」

「けど、レイチエルさんと呼ばして下下さい。兄もそう呼びたいと思うんです。」

お父様は分かつていない。私はお兄ちゃんが好きなんだからしあうがない。けど辛い。悪魔、と呼び去つてやりたいのに。レイチエルさんなどといつお兄ちゃんが一番呼びたいであるう呼称を口に出すなんて。

「マリア。」

「エル。」

「「あなたも大変だったのね」」

二人の声が重なり一人には同時に笑みがこぼれた。

(附記) 後書き

マリアちゃんの記憶でした。なんで急にマリアの記憶を書いたかと
いうとレイウッド扮するレイナルさんが書きたかったからです。
まあ、出番少なかつたんですけど。マリアちゃんはこの時20歳程度
です。姿は2歳だけでも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9646y/>

エルおばあちゃん達

2012年1月13日22時58分発行